

2025 年度 第 2 回医療事務分野教育課程編成委員会 議事録

1. 日時

2026 年 2 月 26 日（金） 14:00～16:00

2. 場所

早稲田速記医療福祉専門学校 本校 6 階 605 教室

3. 出席者（順不同・敬称略）

企業等委員： 須貝和則（国立国際医療研究センター医事管理部長）、町田洋治（東京都済生会中央病院事務次長）、直井智之委員（社会医療法人財団大和会法人本部事務局副局長・武蔵村山病院事務部長）、関 明（東京女子医科大学病院事務部 課長）

本校委員： 川口拓也（校長）、石澤雅子（医療秘書科学科長）、川畑亮子（医療事務 IT 科・診療情報管理科学科長）、江崎侑子（診療情報管理科教員）、榊原幸之（事務局長）

オブザーバー： 前田律子（副校長）

委員会事務局： 土方雄太

4. 欠席者

なし

5. 議長

石澤雅子

議題等

1. 校長挨拶

医事系学生の就職内定率はほぼ 100%であり、求人に対する応答が追いつかない「嬉しい悲鳴」の状態にあるとの報告があった。

高校教員の間で「病院は給与が安い」という誤ったイメージが浸透しており、実際の求人票でも基本給が低く、記載されているケースがあること、また「医療事務は AI でなくなってしまう」という誤ったメッセージも広まっていることが指摘された。6 月の診療報酬改定による業界全体の給与底上げへの期待とともに、他分野との格差を埋めるための教育の魅力発信の重要性、および「ワークライフバランス」（夜勤なし、土日休みなど）が Z 世代の学生にとって大きな魅力となっている現状を理解していく必要性が述べられた。

2. 2025 年度第 1 回委員会議事録案の確認

事務局より議事録案が提示され、委員より役職が変更された旨が報告され、修正の上、承認された。

3. 2025 年度第 1 回委員会以降の主な経過報告

事務局長より、退学率は 1 月末時点で、目標以内を達成できる見込みであること、医療秘書科の就職内定率は 1 月末時点で 8 割を超えたことが報告された。

両学科長より、美容医療分野を強く志望する学生の就職活動が難航している状況について補足があった。多くのクリニックが新卒採用を行わず即戦力となる経験者採用にシフトしていることが背景にあり、学校としては一度病院の皮膚科等で経験を積んだ上で美容医療分野へ進むことを推奨する指導を行っているとの説明があった。

4. 2025 年度教員研修計画・実績

学科長より、6 月の診療報酬改定に向けた説明会へ積極的に参加し教材準備を進めていること、発達障害やコミュニケーションに課題を抱える学生への対応について現場の状況

をヒアリングし指導法を学ぶ研修を強化していることが報告された。

5. 2026 年度カリキュラム編成について

(医療秘書科)

学科長より、医療秘書科において「日本秘書クラブ会長賞」(全国で4名のみ選出される賞)を受賞したことが報告され、教員の献身的な指導の成果であるとの説明があった。

2年次のコースについては「小児・病棟クラークコース」「医師事務コース」「美容医療コース」の3コース制を継続する。

(医療事務 IT 科・診療情報管理科)

学科長・教員より、医療事務 IT 科・診療情報管理科について、診療報酬改定が4月ではなく6月施行となったことで、4月の開講時に最新教材が揃わないことが医事系教員最大の悩みであるとの報告があった。厚生労働省から出る「短冊(資料)」を基に教員が手作業で教材を修正しているが、6月末の検定試験(医療秘書検定)に間に合わせるのは非常に厳しく、現場でも4月施行に戻してほしいという声が根強い一方、教材がない時期は古い点数本で「どこが変わったか」を比較教示する指導法も取り入れているとの報告がなされた。

また、GIGAスクール世代への対応として、高校でタブレット学習が中心だったためキーボードでのタイピングやファイル管理ができない学生が増えており、電源の入れ方やマウス操作から教えるケースもあることITパスポートの授業をオンデマンド化し個人のペースで学習できるようにしていること、ITパスポートやMOSは知識習得だけでなくPCの基本操作を底上げする機会として位置づけていることが説明された。採用側からもITパスポート等の資格が将来のキャリアパス(病院運営・経営企画)を考える上で必須の指標になりつつあるとの認識が示された。

教員より、診療情報管理士試験対策として月1回の模試と個別面談を徹底するし、成績が振るわない学生には細かく指導してギリギリでの合格を狙う体制を構築していること、学生の学力差が激しいため個別指導の時間を増やして対応していること、過去問が入手しにくいいため業者模試や先輩からの聞き取りで過去問をブラッシュアップし繰り返し活用していること、臨床医学の授業が「面白くても試験対策にならない」という課題があり、試験対策に特化した指導をすることの難しさが報告された。

6. 委員からの意見・討議

【医療現場におけるDX・AI活用の進展と教育への影響】

(医療秘書科・診療情報管理科・医療事務 IT 科共通)

委員より、AI音声認識(YOMEL)による議事録作成やRPAの普及、院内スタッフが自前で顧客管理システム(CRM)を構築する事例などDXが加速しているとの紹介があった。他の委員からは、退院サマリーの要約に生成AIが活用され始めていること、今回の改定でも「サイバーセキュリティ対策」等に補助金が出るなどICT化が経営上の最優先事項であることが述べられた。

これに対し両学科長より、AIが作成したサマリーを人間が最終的に検証・修正する能力の育成が重要であること、AIが生成した情報が正しくない場合もあるため「AIを使いこなす、かつ疑う目」を持つことがこれからの医療事務・管理士に求められること、AIが生成した結果を最終的にOKか判断できる学生を育てることが目標である旨が説明された。

【学生の気質変化と「厳しさ」の伝え方】

(医療秘書科・医療事務 IT 科・診療情報管理科共通)

校長・委員より、Z世代の学生は厳しく言われるとすぐに心が折れてしまう傾向があり、医療現場の厳しさは「命に関わるから」であること、その背景を実習前に理解させレジリエンス(精神的な強さ)を育てることが重要課題であるとの意見が出された。

教員からは、学生が「土日休み」「給食が安い」「レジャー施設割引」といったワークライフバランスの要素を重視する傾向があり、採用側も「ワークライフバランスを確立できている」ことをアピールして学生を惹きつけている一方、専門職としての責任や「命を預かる仕事の厳しさ」をどう理解させるかが教育的課題であるとの発言があった。

（医療秘書科・医療事務 IT 科・診療情報管理科共通）

委員から、専門学校卒の学生は「ガッツがある」「現場で伸びる」傾向があり、大卒と比較して病院の現場業務への適性が高いことから、病院側も専門学校が安定して優秀な人材を輩出してくれることに期待しているとの発言があった。

以上